

チレコドンの育て方

Tylecodon

ベンケイソウ科 / Crassulaceae

夏に落葉・休眠し秋から春に茂る「逆張り」のコーデックス。肥大した幹の造形美と多彩な草姿がコレクター心をくすぐる、ベンケイソウ科の冬型塊根植物です。

基本データ

🌱 成長期

冬型（秋～春生育、夏は落葉して休眠）

🌡️ 耐寒温度

最低5℃が目安（園芸情報）

☀️ 日照

日なた（生育期は直射、夏の休眠期は涼しく遮光）

📅 播種適期

秋（9～10月）

🕒 発芽日数

10～22℃で1～4週間（涼しめが要点）

📍 主原産地

南アフリカ～ナミビア（冬雨地域）

🌱 難易度

📌 概要・魅力

チレコドン属（Tylecodon）はベンケイソウ科（Crassulaceae）に属するコーデックス植物の一群で、エケベリアやグラプトペタルムと同じ科に含まれます。1978年、南アフリカの植物分類学者 Helmut Tölken が Cotyledon 属を見直して新属として記載し、属名「Tylecodon」はそのまま「Cotyledon」の音節を入れ替えたアナグラムです。現在、約40～46種が知られており、南アフリカからナミビアにかけての冬雨地域——ナマクアランドやサクレント・カルー、リトル・カルー、グレート・カルーなど——の岩礫地や岩の割れ目に自生しています。年降水量がきわめて少ない乾燥地に適応した多肉植物で、肥大した幹・塊根の造形美がコレクション性の高さを支えています。

最大の特徴は「冬型」の生育リズムと夏の落葉・休眠です。秋から春にかけて葉を展開して盛んに成長し、初夏から夏にかけては葉をすべて落として休眠に入ります。夏型コーデックス（アデニウムなど）が一時停止する日本の冬に、チレコドンはむしろ緑をまとうって動き出す——そのまったく逆のリズムが、複数属を育てるコーデックス愛好家を強く惹きつけます。肥大した幹・塊根は種・個体によって造形が大きく異なり、盆栽的な味わいを楽しむ人も少なくありません。

代表種はいずれも個性的な草姿を持ちます。

- **T. paniculatus（ブターボーム）**：大型のボトル型幹を持つ最大級の種。南アフリカでは「バターの木」とも呼ばれ、老木の大株の貫禄は属内随一。日本では「阿房宮」や「万物想」の和名で流通することがある。
- **T. reticulatus（万物相）**：枯れた花柄が球状にまとまって茎に残る独特の草姿で知られる矮性種。小鉢でも楽しめ、入門種としても親しまれる。
- **T. wallichii（阿房宮）**：ナマクアランド～リトル・カルーに自生する中型種。和名が T. paniculatus と混用されることがあり、購入時は学名での確認を推奨。

- **T. pearsonii（白象）**：白く肥大した茎が印象的な小型のコーデックス種。
- **T. schaeferianus（群卵）**：小型の球状塊根が多数集まる愛らしい群生姿が人気。
- **T. buchholzianus**：細い茎が密に群生しユニークなシルエットを作る珍奇種として流通する。

稀少性と個体ごとの造形の違い、そして冬型ならではの栽培カレンダーの面白さが、チレコドン属の根強い人気を支えています。SEEDSTOCKでは厳選した複数種の種子を取り扱っていますので、実生からじっくり育てる一步を、ぜひこのガイドと一緒に踏み出してください。

チレコドン属の全株にはブファジエノライド類（コチレドシドなど）と呼ばれる有毒成分が含まれます。家畜（特に羊・ヤギ）の中毒原因として南アフリカで古くから知られており、人体への影響も否定できません。植替えや剪定の際は必ず使い捨て手袋を着用し、子ども・ペット・家畜が誤食しないよう管理場所に注意してください。

☀️ 置き場所

チレコドンは日当たりと風通しのよい場所を好みます。自生地の南アフリカ～ナミビアは乾燥した晴天の多い地域で、十分な日照量が丈夫な幹・塊根を育てます。ただし日本の夏は自生地よりはるかに高温多湿になるため、休眠期の置き場所管理が成否を大きく左右します。

生育期（9～翌5月ごろ）

屋外の日当たりよく風通しのよい場所が基本です。直射日光をしっかりと当てることで、締まった幹・塊根と充実した草姿に育

ちます。梅雨時期は雨に当たらない軒下など、多湿を避けた場所へ移しましょう。

夏（6～9月：休眠期）

夏の置き場所管理がチレコドン栽培最大のポイントです。涼しく・風通しがよく・雨の当たらない明るい日陰に移動し、直射日光による過熱と蒸れを避けます。日本の猛暑（最高気温35℃超）では遮光50～70%が目安です。直射日光＋高温＋多湿の組み合わせは根腐れ・株腐れの直接原因になります。

冬（11～2月ごろ）

最低気温が5℃を下回る前に室内へ取り込みます。明るい窓辺（日照確保）に置き、できるだけ暖かく管理しましょう。乾燥状態で管理されていれば軽い霜に耐える個体もありますが、湿った用土での低温は根腐れを招くため注意が必要です。

夏の「遮光・断水・風通し」がチレコドン管理の三原則です。この時期に蒸れさせると秋の芽吹きが止まったり、株が腐ったりする最悪のケースにつながります。

○ 水やり

チレコドンは冬型多肉植物です。生育期（秋～春）にしっかり水を与え、夏の休眠期はほぼ断水するという夏型植物とは真逆のリズムが基本です。日本の高温多湿な夏に水を与えすぎることが、根腐れ・株腐れの最大の原因になります。

生育期（9～翌5月ごろ）

葉が展開し始めたから水やりを再開します。用土が完全に乾いたのを確認してから鉢底から水が流れるまでたっぷり与えます。冬の旺盛な生育期（12～2月）は月2～3回程度が目安ですが、気温・鉢の大きさ・用土の種類によって乾燥速度が変わるため、必ず乾きを確認してから与えましょう。春（3～4月）は徐々に水やり頻度を落とし始めます。

夏（6～9月：休眠期）

大株は基本的に断水します。葉が落ちた後の休眠期に水を与えると、高温多湿と相まって根腐れ・株腐れが起きやすくなります。鉢が極端に軽い場合や猛暑が続く場合は、月1～2回、夕方に少量（翌朝には乾くほどの量）を与えることも選択肢ですが、与えずには注意してください。

幼苗の夏越し（要注意）

播種1～2年目の幼苗は保水力が低く、成株と同じ断水管理では枯れるリスクがあります。真夏でも月1～2回の少量水やりを継続し、細い根が干からびないように気をつけましょう。

「落葉した株に水をやりたくなる気持ち」はよくわかりますが、チレコドンの夏の落葉は正常な休

眠です。水を我慢することが、秋の芽吹きへの最善策です。

🔧 用土・植替え

チレコドン栽培では排水性・通気性に優れた用土が根腐れ予防の基本です。水もちが良すぎる用土は、特に夏の休眠期に致命的なリスクをもたらします。

用土の配合例

- **手軽な方法**：市販のサボテン・多肉植物用培養土をそのまま使用。排水性が不足すると感じたら軽石やパーライトを20～30%追加する。
- **自家配合（基本）**：硬質赤玉土（小粒）3 + 軽石（小粒）4 + 鹿沼土（小粒）3 程度の無機質中心の配合。みじん（微細粒）は事前にふるいで除去する。
- **実生用（播種後～数カ月）**：バーミキュライト5 + 硬質赤玉土（細粒）5 など、細粒で根が張りやすい配合からスタートし、成長に合わせて無機質配合に切り替える。

鉢の選び方

通気・排水性の高い素焼き鉢やスリット鉢を選びましょう。受け皿に水をためたまにすることは厳禁です。塊根が太い種は根を傷めにくい深めの鉢が扱いやすいです。

植替えの時期と手順

植替えの適期は生育期の入り口となる秋（9～11月）です。新芽が動き始める前後が理想的なタイミングで、株へのダメージが最小になります。

- 古い用土をていねいに落とし、根の状態を必ず確認する。黒ずんでいたり柔らかくなったりした腐った根は清潔なはさみで除去し、切り口を数日陰干しする。
- 植え付け後は直射を避け、数日間水やりを控えてから少量の水を与える。
- 大株は2～3年ごとの植替えでも良いが、用土の劣化（通水性の低下）を感じたら早めに対処する。

植替え・剪定の際は有毒成分（ブファジエノライド類）の接触を避けるため、必ず使い捨て手袋を着用してください。作業後は手をよく洗い、使用した道具は水洗いして保管しましょう。

🌱 発芽のさせ方

チレコドンの実生は、適期と温度管理さえ守れば初心者でも挑戦できます。最大のポイントは「秋に、涼しく播く」こと——夏型コーデックスとは逆のタイミングを覚えておきましょう。SEEDSTOCKからお届けする種子は鮮度を大切に管理していますので、届いたら早めに播種してください。

播種の適期と発芽適温

播種の適期は9～10月（涼しくなってから）です。発芽適温は10～22℃のやや涼しい帯で、夏型コーデックスの25～30℃以上とは逆です。日中の気温がまだ高い8月以前の播種は発芽率が著しく落ちるため、涼しさが感じられてから播くことを強くすすめます。

手順

1. **用土を準備・殺菌する**：パーミキュライト5+硬質赤玉土細粒5など、排水性の良い無機質中心の種まき用土を容器に入れ、電子レンジ（600W・3分）または熱湯を注ぐ方法で殺菌します。カビ（ダンピングオフ）予防が最初の一手です。
2. **用土をしっかりと湿らせる**：腰水（容器の底から吸水させる底面給水）で用土全体が湿るまで十分に水を含ませます。表面からの水やりは種を流してしまうため、ここでも腰水を使います。
3. **種子を播く（覆土しない）**：チレコドンの種子は非常に微細で、くしゃみで飛ぶほど細かい種もあります。湿らせた用土の表面に、種子が重ならないよう静かにばらまきます。覆土は不要です（埋めると発芽できません）。紙の折り目や耳かきを使って慎重に取り扱いましょう。
4. **湿度と温度を保つ**：透明な蓋やラップで容器を密閉し、高湿度（80～90%以上）を保ちます。発芽適温（10～22℃）を維持できる涼しい室内に置きます。強い直射日光は避け、明るい半日陰が理想的です。
5. **腰水を切らさない**：発芽まで腰水を継続します。上から水をかけると種子が動いてしまうため、常に底面給水で管理します。腰水にダコニール水和剤（1000倍希釈）を加えると、カビ予防に効果的です。
6. **発芽を確認する**：適温・適湿が保てれば早いもので播種後3～7日で初発芽が見られます。種・ロットにより差があり、最大4週間前後かかることもあります。発芽率は種・ロットにより異なり（10～40%程度の実績報告あり）、焦らず見守りましょう。
7. **発芽後のふた外しと遮光管理**：発芽が揃い始めたら少しずつ通気を確保し、2週間程度かけて蓋を外します。発芽直後は遮光50%の半日陰で管理し、11月以降、日差しが和らいだ時期から徐々に日光に慣らしします。腰水は発芽後2カ月程度は継続しましょう。
8. **最初の夏越し（幼苗）の注意点**：チレコドンは成長が非常に遅く、2年で高さ約2cmほどです。播種1～2年目の幼苗は成株と異なり、夏も月1～2回の少量水やりを継続してください。涼しく風通しのよい明るい日陰で管理し、完全断水は厳禁です。

チレコドンは発芽率に幅があり、同じ条件でも10%を下回るケースもあります。種子の微細さと希少性を考えると、1粒の発芽も大切な成果です。丁寧に育てた幼苗の塊根が少しずつ膨らんでいく様子は、実生ならではの喜びです。

病虫害・トラブル

チレコドンの病虫害トラブルの多くは夏の高温多湿による蒸れと過湿が引き金になります。日本の梅雨から夏にかけての管理が最大の難関であることを意識しておきましょう。

主な病虫害

- **カイガラムシ（コナカイガラムシ）**：茎・葉の付け根に白い綿状の塊として現れます。70%のイソプロピルアルコールを綿棒に含ませて直接除去するか、殺虫剤（オルトラン粒剤の土壌混入）で対処します。
- **ネジラミ（根のカイガラムシ）**：根に寄生し、地上部が突然枯れ込んできたら疑います。植替え時に根を水で洗い流して確認し、浸透性殺虫剤で処置します。
- **ハダニ**：高温乾燥時に発生しやすく、葉に細かな傷や変色をもたらします。殺ダニ剤または水でしっかり洗い流す方法で対処します。
- **アブラムシ**：新芽や花柄に集中して発生します。カリ石鹼液やニームオイルで早めに対処します。

主なトラブルと対処

- **根腐れ・株腐れ（最大リスク）**：夏の過湿が主因。腐った部分を清潔なカッターで切除し、切り口を数日陰干ししてから新しい用土に植え直します。予防（夏の断水・遮光・風通し）が最善策です。
- **軟腐病（急速な軟化・腐敗）**：高温多湿と傷口からバクテリアが侵入し、株が急激に軟化します。夏は雨に当てず通気を確保します。ダコニール水和剤の予防散布も有効です。
- **徒長**：日照不足・水やり過多で茎が間延びします。生育期の直射日光確保と適度な水やりで予防します。いったん徒長した部分は元に戻りません。
- **低温障害**：5℃以下の環境に長時間置くと株が傷みます。湿った用土での低温は根腐れを招くため、冬の水やりは控えめに管理します。
- **実生のダンピングオフ（立ち枯れ）**：幼苗期に糸状菌が侵入する初心者の大敵。播種土の殺菌・ダコニール希釈液での腰水・通気確保で予防します。

チレコドンのトラブルは「夏に水を与えすぎる」「蒸れた状態を放置する」ことから始まるケースがほとんどです。秋の芽吹きに向けて、夏の涼しい断水管理を徹底しましょう。

栽培メモ



チレコドンの種子を探す
QRを読み取る／seedstock.jp